

教育研究活動報告

「地域に根ざす教育」を求めて

北 川 喜美子

私は、これからの大学は、地域に愛される大学でなければならないという考えを持ち続けています。又、大学が地域に根づいた教育の発信源であるという自覚と責任を、持つべきであるという考えも、持ち続けています。それゆえ、教員の役割は、授業を受持つことだけに留まらず、絶えず地域の中に溶け込み、課された仕事の還元をすべきだと考えます。今回は、私自身の教育理念に基づいて実践している教育研究活動について、報告いたします。

キーワード：地域、ボランティア、交流、学生参加

1. 幼稚園等に於ける

オペレッタ（音楽劇）公演

私が授業の中で大切にしていることは、基礎的な知識の上に立って、学生同志がお互いを見たり、お互いに考えたり、お互いと創ったりすることであり、そのことにより生じた考え方、作品、エネルギー等をまとめて発表する場面や場所を提供することです。その一つに幼児教育専攻一回生の授業、科目名「声楽」「幼児音楽」の中で取扱っている「オペレッタの制作と試演」があります。

これは学生一人ひとりがいろいろのお話（童話、民話、昔話等）を題材とし、オペレッタを創るのです。つまり受講生が全員オペレッタの作者になるのです。

台本をつくり、音楽を考え、動きをも考えるのです。そして、提出された作品の中から音域や演奏時間、子どもの理解程度等、子どもにとってふさわしい教材であるかをチェックをし、選択します。そして、選択した作品をクラスの中でグループ分けしたメンバーで

発表するのです。あくまでも授業の中での発表であり、普段使用している教室での発表ではあるが、「試演会」と名付けている。自分達の創作、世界に一つだけのオペレッタ、市販されていないオリジナルの作品ということもあって熱が入ります。意見を出し合い、相談し、キャストを決め、制作を進めていく意欲的な姿に、現場でうまく羽ばたいていくくれる保育者の姿を垣間みることができます。

この課題に取り組んで、約20年近くになりますが、段々と大げさに華々しくなってきた、近年は地元の幼稚園等に出張公演させていただくまでになりました。

オペレッタを制作、試演することは、声楽や幼児音楽、リトミック、幼児体育、絵画制作等の授業の中で学んだことを表現できるいわば総合的発表であり、現場に出た時、あらゆる場面で活かせる要素を含んだ授業だと考えています。つまり、どんなおもしろいお話も、声が小さくて聞こえなかったり、せりふ等のことばが不明瞭では台無しです。無駄な動きやわけのわからない動き、重くドタバタした動きも、イメージを壊してしまいます。

演じる時、背景や小道具も視覚を楽しんでいただくという点では重要なポイントです。つまり学生一人ひとりの得意性が発揮できるのです。そしてそれは幼稚園教育要領の中での五領域(健康・人間関係・環境・言葉・表現)のすべてと何らかの形で関わると考えられます。それゆえ、わずかな時間配分ではありますが、私の教育観の中での大切な取組みになっております。

学外公演(2000年度より実施)

2000年	しらゆき姫	S 幼稚園(向島)
01年	11びきのネコ	S 幼稚園(向島)
02年	しらゆき姫	F 幼稚園(向島)
	おおかみと 七ひきのこやぎ	S 幼稚園(向島)
03年	三びきのこぶた	F 幼稚園(向島)
04年	人魚姫	F 幼稚園(向島)
05年	11びきのネコ	K 幼稚園(宇治市)
	しらゆき姫	K 幼稚園(宇治市)
06年	しらゆき姫	K 幼稚園(宇治市)
	くじらぐも	M 幼稚園(伏見区)
	しらゆき姫	M 幼稚園(伏見区)

そして一方、オープンキャンパスでも、毎年高校生を前に、このオペレッタを在学生たちは立派に演じています。

2. 学生参加による

老人福祉施設での音楽セッション

少子・高齢が話題になり、人間の平均寿命も大きくのび、日本は今や、世界一の長寿国になりました。が、人間は老いと共にいろいろの症状の発生に悩まされます。視力が、思考力が衰え、足腰が弱わり、杖をつかったり、車椅子を利用したりします。そして一番大変

なのが認知症です。大きな声でわめいたり、同じ事ばかりを口にする方も少なくありません。

又、たった今の記憶が失なわれ、職員を困らせている場面も目にします。「音楽療法」の勉強をはじめて、いろいろの講習を受講していた時、「少し勉強になるので実際にやってみなさい」と声をかけていただき、学校から一番近い向島にある福祉センターに月2回出向くことになりました。

当時、私は家庭で老人をかかえ、介護に四苦八苦していた時期でもあり、又、自分の地域に根ざす教育をめざすという考え方からはずれていないと考え、喜んでご老人といっしょに音楽を楽しむ事を試行錯誤をくり返しながら続けてきました。自分の母とむきあう時の勉強にもなりました。変化の少ないご老人の生活の中から好きな曲、好きな歌手、なつかしい思い出の曲、大ヒットした曲等を調べ、毎月プログラムを作成しました。私がプログラム作成で気を付けていることは下記の事です。

- 1) 入所者(利用者)の誰もがご存知の曲を選ぶ。
- 2) 入所者のリクエストに応える。
- 3) 童謡・民謡は必ず入れる。
- 4) 季節を感じていただけるような曲目を選ぶ。
- 5) 昔話を歌う(桃太郎、一寸法師、花咲じいさん、金太郎等)
- 6) 軽く歌に合わせて、身体が動かせる曲を選ぶ等

毎月、簡単なリズム合奏やリズム体操等も盛り入れ、1回のセッション時間は40分から45分と決め、実施いたしております。そして2001年(平成13年)より、学生参加の老人福祉センターに於ける音楽のセッションを実施

してきました。といっても、普段は授業等でなかなか時間の調整がむづかしいので、毎年夏期休暇中の8月と9月に2回ずつ実施いたしております。

そして学生参加のセッションの中で気付いたことは、下記のような事です。

- 1) 若い人が傍にいただけで、ご老人の気持が華やぎ、やろうという意欲が見られる。
- 2) 普段のセッションより、集中力アップがある。
- 3) 孫達を見守る視線を示し、ご老人の顔つきが優しく、柔和になられる。
- 4) 普段のセッションより、元気で声が大き。
- 5) 学生達ととても楽しそうに話される等毎年、若い人の不思議な力におどろかされています。そして8月には、戦争の話（どんな物を食べましたか、終戦の時はどこにいらっしましたか等）を話題にし、9月には子どもの頃の遊びを話題にし、なるべくご老人と学生達との会話の時間を多くもつことにしています。そして、学生達に感想を聞くと、
- 1) 終了後、離れて住んでいるおばあちゃんにすぐに電話しました。
- 2) いっぱいしゃべって下さり、感激しました。
- 3) 戦争の話では少し涙ぐまれ、びっくりしました。
- 4) 自分のおじいちゃんやおばあちゃんに対してはもちろんですが、ご近所のご老人にも話しかけてあげようと思う。
- 5) 昔の知らない歌を教えてもらった。
- 6) ご老人からエネルギーをもらった。
- 7) 昔の遊びも、今の遊びもあまり変わっていないと感じた。

等を話してくれました。たった一度のセッションから、幼稚園や保育園の実習では決して学べないもの、感じられないものを、直接真正面で感じられた体験だと思います。今後、福祉施設も総合施設となり、保育園の横に老人施設があり、小学校がありという形でお昼休みには園児が遊びに来てくれたり、小学生がおやつを配ってくれたり、いつでも和やかな交流があり、窓からは、かわいくてはつらつとした子どもたちの姿が見られるようになった時、私のこのつたないセッションも何らかの形で生きていくことを願っております。

実施施設：老人特別養護施設（向島）

参加学生：児童教育学科1回生 有志

参加学生数：一回につき 約7名程度

3. 学生参加による知的障害者施設での音楽セッション

音楽療法の勉強をはじめて4年目、卒業生の一人から電話がかかってきました。内容は「自分の勤めている施設にぜひ来てほしい」というものでした。私は、これまた、自分の教育方針と合致している事と、以前からぜひ研究してみたい分野でもあり「勉強のつもりで」という事でお引き受けする事になりました。

ところが、行ってみてびっくり、想像以上の状態でした。始まってもワァーワァー泣く人あり、部屋の真中で大の字になって寝ている人あり、動き廻る人ありで、まったくセッションをするという雰囲気に至りませんでした。が、回を重ねていく中で彼等が音楽がとても好きなこと、又、中にはリズム感がとてもよく、おもしろいリズム打ちをなさる事にも気づき、試行錯誤を続けながら今日に至っ

ています。そして、続けていく中で、もう少し軽度の人の通所施設（作業所）でセッションする事にもなりました。両施設を比べたり、いろいろな行事等に参加させていただき、次第に個人差はあるが一人ひとり音楽的センスや好み、音楽の種類や音色そしてボリュームの好み等も少し理解できるようになりました。そして、それらのセッションで私自身が気をつけていることは、

- 1) プログラムの中に季節を感じていただく曲を必ず組入れること。
- 2) 始まりの曲を決め、その音楽により「始まりの意識」をもっていただくこと。
- 3) 何がおこっても、驚かない。（強くたたかれたり、つばを顔にふきつけられた事もあった）
- 4) 回を重ねる毎に、集中力の向上を考える。
- 5) 簡単な楽器を奏していただく。

のような事であり、今年で5年目に入りました。

ある時、始まりの曲＝シンコペィチング・オクロックのCDをかけるのを忘れた時、仲間の一人がさわぎ出しました。しばらくしてやっとレコードをかけるのを忘れていた事に気がつき、もう一度最初からやり直した事がありました。又、ベートーヴェンの交響曲第5番（運命）を鑑賞教材として使用した時、第1楽章だけで8分程あるのですが、とても静かに、熱心に、しかも全員がひとつになったように聞いてくれた時は思わず感動し泣けてきました。そして、実習等にいった時、少しでも参考になるかもしれないという思いで授業の中で彼等のようすを学生達に話しました。そうしたら、以外なことに「ぜひ、行ってみたい」という声が出ました。さっそく施設に問うと、「大歓迎ですよ」という事で、07年よ

り学生参加の知的障害者施設での音楽セッションがスタートしました。

やはり、この施設でも8月、9月の授業のない時に限定せざるをえませんでした。最初ゴチゴチにかたくなっていた学生達も、施設の仲間と「ドラえもん」や「トトロ」の歌では、いっしょに踊って楽しそうな笑顔を見せてくれました。

通所者の皆さんは、若い学生たちと歌ったり、話したり、踊ったりが出来たので大はしゃぎでした。身体的に不自由な人も多く、ベッドや車椅子等の中で顔を赤らめ、顔全体、体全体で楽しさやうれしさを表現してくれました。又学生たちも

- 1) とても勉強になった
- 2) 発語はなかったが、楽しそうにタンバリンや鈴をたたいている姿に、音楽の楽しみ方に、いろいろあることに気づかされました。
- 3) 全員がとても明るく、エネルギーをもらった

等、感想を述べてくれました。暑い中での参加であったが、参加学生全員、気持ちよく笑顔で明るく彼等に接ってくれた事は、はじめての試みでもあったので、ホッと胸をなで下ろすと同時に、このセッションでも若い人の素直で何か人をひきつける力の大きさを感じ、このセッションも継続させていただき勉強を続けていこうと強く感じました。

その後、入所者さんたちと参加してくれた学生たちといっしょに、本学の食堂で食事会を催しました。

実施施設：知的障害者（児）生活労働センター作業所（いずれも城陽市）

参加学生：児童教育学科 1 回生

参加人数：全3回 15名

4. 槇島地区コミュニティー 推進協議会事業への参加 (地元小学生との交流)

この事業への参加は槇島コミュニティセンターからの依頼で、今年で4年目になります。

地元の小学生（宇治市立の二校）とその保護者との交流で、これは私の担当するゼミ生と取組んでいる行事です。内容的には、あそぶ、お菓子づくり、音楽演奏等が含まれ、ゲームをしたり、ミニ運動会のような事をしたりと、前半は身体を使って小学生と短大生との交流をし、後半は、楽しいお菓子づくりです。毎年12月にクリスマス会をかねて行なうので、デコレーションケーキづくりを続けています。

ここでも学生達は見事にお姉さんぶりを発揮し、小学生とのコラボを真から楽しみ、がんばって多くの事を吸収し、これから就く職業に少しでも近づけようと努力している姿がみられます。そして何よりもクライマックスは、自分たちの合作であり、世界に一つだけのデコレーションケーキを友達、お母さん、そしてお姉さん達と食べる時です。食べるスピードの速いこと。すぐにケーキや、いっしょにつくった軽食やデザートも、見事になくなります。

お母さん達も、普段は何もしないわが子が、かいがいしく野菜を切り、盛りつけたり、ケーキづくりに夢中になっている姿を見て感動しておられ、「おいしい、おいしい」を連発しながら、ペロッと食べていただいています。

最近は各家庭でお母さんといっしょに台所にたち、食事の準備や後かたづけ等の手伝いをさせておられる家庭が少なくなっています。又、ケーキ等は家で作られることも少なくなっ

てきました。が、やはり共同作業のすえ出来た「できたて」や、材料のわかった食品という事もある、安心して口に運べると同時に、自分達の作品を味わう事は、その食べっぷりから楽しさや喜びがよく伝わってきます。

ゼミ生にとっては就職活動で忙しい時期であり、準備等で大変負担をかけていると思うが、幼稚園児や保育園児とは異なる子どもの接し方や言葉づかい、コミュニケーションの取り方等を学び、母親たちとの接し方をも、学んでくれているものと考えますと、この事業への参加も毎年異なる企画を楽しませてもらえる事で継続する意義があると考えます。

実施施設：コミュニティセンター(宇治市)

実施日：毎年12月初旬

参加学生：授業担当ゼミ学生

5. コーラス指導

本学から歩いて5分くらいの所に、宇治市立K小学校があります。そこで、元PTAの方々と構成したコーラスグループ「P」が練習をしておられます。不思議なご縁でそのコーラスの指導を私がお引受けすることになりました。

団員のみなさんが歌好き、そして全員、とても仲が良く、したがって練習も毎回とても熱心です。いつも感心しながらおつきあいさせていただいています。

練習の他、春や秋にはレクレーションに出かけたり、常に連絡をとりあい、このグループの推進、維持に心を配っておられ、毎週練習毎に、温かい空気と若々しいエネルギーを感じております。

参加した音楽会

- 06年 10月 ミュージック・フェスティバル
宇治市文化センター大ホール
- 07年 3月 やましろ合唱フェスティバル
久御山町中央会館
- 07年 8月 第11回 たそがれサマーコンサート
宇治市植物公園
- 07年 10月 ミュージック・フェスティバル
宇治市文化センター大ホール
- 07年 12月 クリスマス・コンサート
宇治市 老人福祉施設「さわら
び園」
- コーラスグループ名 ぽこゝぽこ
(宇治市音楽連盟に所属)

6. 出版書籍の寄贈

地域に根づいた教育実践として、新しく始めた事は出版書籍の寄贈です。

1. 「宇治むかし語り」(絵本とCD)

『宇治・民話の会』の著者『宇治・山城の民話』との出逢いをきっかけに、昔話を研究するようになり、当時を知らない子どもたちに昔の宇治のようすを「見て楽しい読み物」として知ってもらう方法の一つとして、民話の会のご承諾を得て文章に絵を描くのは京都文教短期大学・児童教育学科の学生。昔話を音源として残そうと、昔話の朗読を私が担当し、絵本とCDという形で出版させていただきました。

耳を通しての教育が「聞く力」を育て、それは「話す力」へとつながり、「考える力」を導くものであると考えます。

絵本は子どももおとなも楽しいものであるべきです。そしておとなが、子どもに読んで

聞かせてあげる書物だと考えます。

何度も聞いているうちに、すっかりそのお話を覚えてしまいます。そしてあたかも文字が読めるのかしらと錯覚するように、子どもは絵本を見て「むかし、むかし……」と読みます。つまりおとなが読んであげるという行為は、子どもを本好きに、又、ことばや文字に興味を持つ子どもを育てることになると考えます。

子どもは昔も今も昔話が大好きです。お母さんも保育士の方々も、おじいちゃんやおばあちゃんも、自分の住んでいる土地に伝わる昔話や伝記等を話してあげていただきたいと思います。それは子どもにとって生涯、心に残る場面であり、喜びと共に心の遺産になることでしょう。

とりわけ、これから職に就く人に、研究し現場で語ってほしいと願い「宇治むかし語り」を出版しました。

2. 絵本童謡「うたはともだち」

この種類の本は、すでに沢山出版されていますが、児童教育学科専攻の短大生による作品の出版はユニークだと考えます。どの作品にもオリジナリティが溢れ、そこには常に子どもをみつめ、子どもの目線でものを考える学生の眠がありました。授業の中での作品であり、作画者の学生にとっては、もっと工夫した作品をとという想いがあったことでしょう。全作品の6割が卒業生、4割が在学学生であり、先輩と後輩とのほほえましいコラボレーションとなりました。

音を描くことは「聞く耳」を育て「感じる心」を生み出し「想像する力」を豊かにし「表現する意欲」を導き、それは「生きる力」へとつながると信じております。又それは、ま

さしく幼稚園教育要領の五領域（健康・人間関係・環境・言語・表現）と何らかの形で関わると考えています。そして童謡絵本を見ながら子どももおとなも楽しくて、かわいらしい童謡をいっしょに歌っていただきたいと願っております。誰かが、自分のために歌ってくれる、声をあわせてくれる事は、子どもにとって大きな喜びでしょう。

以上のような考えの上にたって、2冊を同時に出版し、CDをつけて宇治市の幼稚園、保育園、小学校、老人福祉施設、作業所、視覚障害者施設等に寄贈させていただきました。

地元の昔話は、自分の知っている地名のお話とあって、子どももおとなの人達にも大変喜んでいただきました。けっして学術書ではないが、多くの皆様に喜んでいただけた事、本学が宇治市に位置することから考えても、又、今こういう時代だからこそ、又消えつつある日本の財産的な歌やお話を保存し、伝承していくという使命感をもって出版した事に対して、新聞（京都・洛南）、テレビ（KBS 京都）等で紹介していただき、思わぬ方面の方々から沢山のご支援をいただき、その土地の資料等もご提供いただきました。そしてCDを通して、視覚障害をお持ちの皆様からも応援をいただき、唯只、驚きと感謝の気持ちいっぱいでございます。

むつかしい本を出版することも、もちろん意義のあることですが、誰にでもわかり易く楽しんでいただける本を、とりわけ地元の皆様に読んでいただいてこそ、民話や昔語は値打ちがあるものだと確信いたしております。

近く、この「宇治むかし語り」を点訳していただけるというニュースが届き、又感激でございます。この取組も諸費用等、大変な面もありますが、次年度は山城地方へと拡げて

いく計画をたてております。もちろん本学・児童教育学科の学生諸姉全員にも配布させていただいた事を付けくわえさせていただきます。

このように盛り沢山の事を通して、私の教育理念であります「地域に根ざす教育」をアップアップしながらも、続けてまいりました。しかし、一つ一つはバラバラのように見えますが私の専門の声楽や音楽教育と密接に結びついており、この六つの項目の多くは、すべて学生と共に悩み、考えを進めてまいりました。学生の生活意識向上、耳を育て、目を育て、考えを育てるという観点から微力ながら、これからも取組を進めてまいりたいと考えております。